

旧町人地

萩城下町の商人街は、かつての上級武士が住んでいた地域や萩城の東側に位置している。美しく保存された商家や白壁の迷路のような街並みが特徴である。白壁の迷路のような街並みには、保存状態の良い商家が立ち並び、多くの塀からは夏蜜柑の木が突き出ている。白壁は夏蜜柑の木の海風から守っており、土壁に吊るされた夏蜜柑は 20 世紀に入ってから萩のシンボルとなっている。

商人の町は、長州藩主である毛利大名が参勤交代のために江戸へ赴く際の街道、御成道を中心としていた。御成道は城から町を通過して東に走り、唐樋札場で南に曲がっている。商店街は、西側の武家屋敷の正門と東側の看板の間の道にまたがっている。

江戸時代の多くの商人がそうであったように、萩の商人も徳川幕府の平和な時代に豊かになった。萩の商人たちの豊かさは、街の壁にも見ることができる。黒瓦と白漆喰の土壁は、威信と富の象徴であった。瓦と漆喰の十字模様が特徴的なこの土壁は「なまこ壁」と呼ばれている。

御成道に通じる脇道の多くは、そこに住んでいた商人の名前が付けられている。伊勢屋横丁は裕福な伊勢屋家、菊屋横丁は菊屋家、江戸屋横丁は江戸屋商人にちなんで名づけられた。特に江戸屋横丁には、旧木戸孝允邸と旧青木周弼邸など、江戸時代の建物が数多く残っており、市の保存状態が良く、一般公開されている。また、旧菊屋邸は菊屋家が運営する私設資料館として一般公開されている。

商人街は武家街とともに萩城下町として知られるエリアを構成しており、ユネスコの世界遺産「日本の明治産業革命遺産」にも登録されている。